

## 第6学年 国語科学習指導案

6年担任 伊藤綾美

場 所 6年教室

### 1 単元名 物語から作品の心を受け取る

教材文：「かさこじぞう」「海のいのち」

### 2 単元の目標

○物語が自分に最も強く語りかけてきたことをまとめる。

- ・物語が自分に最も強く語りかけてきたこと考えながら読もうとする。(関心・意欲・態度)
- ・中心となる人物の心情の変化とその理由を読み取る。(読む)
- ・自分が物語から受ける感動の中心をとらえて表現する。(読む・書く)

### 3 児童の実態

本学級は、男子7名、女子4名の11名から成る。学級訓「積極的芯花」を合言葉に、あらゆる面で最上級生であることを意識して諸活動に取り組んでいる。

学習に対する態度は前向きで、授業終末のふりかえり(本学級では「今日の学び」と呼称)の記述を見ると、個々にその時間の要点をとらえることができていることがわかる。しかし、前年度までの学習事項が十分に身につけていない児童が多く、さらに、新たに学習したことを長期記憶として保持しておくことが苦手という課題を抱えている児童(B児・D児・G児)もあり、既習事項の復習や確認が欠かせない学級でもある。

国語では、1学期に「風切るつばさ」という文学的な文章を教材とし、人物関係図をつくりながら人物と人物との関係を手がかりに読解を進めていくことを学んだ。この実践の中で、「作品の心」(筑波大学附属小：二瓶弘行先生)という言葉を用いて、物語が最も強く語りかけてきたことを短い文章にまとめる活動を取り入れた。「友情」、「あきらめない心」「仲間とのきずな」など、自分なりに読解を通して感じたことを表現することができたが、迫り方に物足りなさが感じられたり、友達の意見に左右されてしまい自分の考えをもてなかつたりする児童もみられた。本実践の直前には、「新聞の投書を読み比べよう」という説明的な文章を教材として、書き手の工夫を読み取る活動を行った。述べ方が同じように展開される4つの投書が教材だったため、児童は比較しやすく、そこから工夫している点を見つけることも容易だった。この活動から、比較から何かを導き出すという活動が、本学級の児童に向いていることが明らかになっている。

一方、日々、少しずつでも活字にふれたり、声に出して文章を読んだりできるように、朝の会では音読を取り入れている。音読を苦手とする児童(B児・D児・E児・F児・G児)には、教師の範読をくり返す形で練習をさせ、自信がついたら一人で読むというようにしている。現在は、『奥の細道』の冒頭に挑戦しているが、リズムを感じて読めるようになってきている。

### 4 単元について

本単元は、「海のいのち」という物語を教材として、文学的な文章の読解力を高めていくものである。小学校で学習する読解を中心に据えた文学的な文章の単元としては最後の単元となる。そこで、自分に最も強く語りかけてきたこと(=作品の心)をまとめることを最終の目標として児童にも示した上で取り組んでいく。

しかし、3でも述べたように、本学級の児童は、前年度までに身に付けておくべき読解の基本が十分に身につけていない。そこで、単元の導入にあたり、2年時に教材として使用した「かさこじぞう」を用いて、物語の読み取りの基礎をさらう活動を取り入れる。「かさこじぞう」を用いて復

習するのは下の5点とする。

#### 【読み取る】

- ・登場人物をとらえる。(中心人物、重要人物、その他の人物)
- ・物語の語り手と語り手が寄り添っている人物をとらえる。
- ・いくつの場面からできているかを考えた後、基本4場面(導入・展開・山場・結末)をとらえる。
- ・あらすじをまとめる。
- ・文章中の記述をもとに、人物像をとらえる。

「海のいのち」は、小学校を卒業する学年にふさわしい難解な物語であるが、「かきこじぞう」の読み取りを通して物語の基本となる読み方を理解した児童は、「比較」という得意なアプローチで、「海のいのち」の大枠をとらえていくことができるのではないかと考えたためである。「海のいのち」を読み解く上でとまどいが生じた場合には、「かきこじぞう」に戻り、「かきこじぞう」のときはどのように読んだのかをもとにすることで、「海のいのち」をできるだけ自分たちの力で読み進めていけるようにしたい。また、このように二本立てで読解を進めていくことは、国語の授業が一つの教材文を読み取ることに終始しがちなことから生じている「国語科の学習では、何が身に付いたのかが判然としない。」という児童の実感を乗り越えることができる手法であるとも考えている。つまり、自分の読み方をメタ認知することで、身に付けた読み方に汎用性が生じ、今後の国語科の授業や読書生活、実生活において活用することができるのではないだろうかと考えたのである。

「海のいのち」の読解の後半は、「読み深める」段階である。物語の大枠をとらえた段階で、一人では読み取れない、友達がどのように読んだのかが気になるという場面を、グループや全体で取り上げながら読解を進めていく。ここでは、自分たちで課題を解決していく達成感を味わわせたい。そのために、具体的なグループワークの進め方を示すのではなく、その方法も自分たちで試行錯誤し、選んでいけるようにする。

最後には、「作品の心」をまとめ伝え合う活動を行う。これまでの実践では、書き上げたものを伝え合うことで単元を終えることが多かったが、今回は、書き上げる途中で交流させる。そうすることで、交流することのよさを児童が実感しやすくなり、また、その成果を最終的な「作品の心」に反映させることもできるのではないかと考えたためである。本単元の実践を通して、「ヒロシマのうた」の読書活動に生きる読解力と表現力を身につけていきたい。

#### 5 単元構想 (別紙1)

#### 6 本時の学習

##### (1) 本時の目標

- ・「もちろん」という言葉から、作品に通底する自然への畏敬の念に迫る。

##### (2) 本時の視点

- ・本時の課題「なぜ、もちろん太一は生がいだれにも話さなかったのか」は、児童の学ぶ意欲を45分間持続させ得るものだったか。
- ・本学級の児童が、より充実したグループワークをするためには、どのような手だてが考えられるか。

##### (3) 準備

(教師) ホワイトボード・ホワイトボードペン

(児童) 教科書・ノート・全文シート(A4大)

##### (4) 予想される児童の活動 (別紙2)

<p style="text-align: center;"><b>学習活動</b>      <b>予想される児童の活動</b></p>	<p style="text-align: center;">※教師支援   ◇評価</p>
<p><b>「かさこじぞう」でおさらいしよう①～⑤</b></p> <p>①「かさこじぞう」を通読して、登場人物をとらえる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ばあさまは重要人物だよ。(E児)</li> <li>・じぞうさまもじいさまたちの生活を変えた重要人物だ。(F児)</li> </ul> <p>②「かさこじぞう」を場面分けする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「時」「場所」「人物」に注目して分けるんだね。(A児)</li> <li>・「日もくれかけました。」ってあるから、「時」が変わっているけれど、次の文で「村の外れの野っ原」に「場所」が変わっているから…。どちらで場面を変えようか迷う。(J児)</li> </ul> <p>③「かさこじぞう」のあらすじをまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「時」「場所」「人物」はわかるけれど、「どうした」が難しいな。(C児)</li> <li>・「時」「場所」が書いていない場合もあるね。(K児)・短くまとまったよ。(G児)</li> </ul> <p>④「じいさま」と「ばあさま」の人物像を読み取る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ふぶきの中、素手で「じぞうさま」の雪をていねいに払っているよ。(F児)</li> <li>・よいことをしているのに、「おらのでわりいが」とあやまっているよ。(E児)</li> <li>・かさこが売れなくても、ふぶきの中でも、家で食べるものがなくても、「じいさま」も「ばあさま」もにこにこしているよ。(H児)</li> <li>・なんとなく「優しい」ではなくて、じっくり読むと、優しさが表れている場面がたくさんあったよ。(G児)</li> </ul> <p>⑤【作品の心】と【単元(前半)の学び】をまとめる。</p> <p><b>【作品の心】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・このお話を書いた人は、誰かに何かいいことをすれば、必ず自分にかえってくるということを伝えなかったと思う。(H児)</li> <li>・どんなことがあっても笑顔で過ごしていた「じいさま」と「ばあさま」のように、わたしも笑顔でいたい。(C児)</li> </ul> <p><b>【単元(前半)の学び】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・文章には書かれていない部分も書かれていることをもとに考えられた。(K児)</li> <li>・一文字のちがいでもとらえ方が変わることがある。じっくり読みたい。(A児)</li> </ul>	<p>※物語の読み方の基本をさらうために2年時の教材文である「かさこじぞう」を読む時間を単元の前半に組み込む。</p> <p>※文章全体を意識して読み進めたり、視覚的に全体をとらえたりしやすいように、本文をA3用紙1枚に収めたものを配付する。</p> <p>※身についた技能を意識したり、今後に生かしたりできるように、学習事項を掲示していく。</p> <p>※場面分けの根拠を視覚的にもとえられるように、A3用紙の本文に「時」「場」「人物」に色鉛筆で線を引く活動を取り入れる。</p> <p>※アクティブラーニング(以下AL)の土台をつくるために、③と④はグループでしあげていく。また、完成したあらすじをグループごとに交流する。</p> <p>※文章からだけでは十分に読み深められない児童には、挿絵にも注目するように促す。</p> <p>※自身の読み方をメタ認知して意識させ、今後に生かせるように、「かさこじぞう」が終わった時点で、一度【単元の学び】をまとめ、交流できるようにする。</p>
<p><b>「海のいのち」を読み深めよう。⑥～⑯</b></p> <p>⑥～⑧物語の全体像をつかむ。(登場人物・場面・あらすじ)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「時」「場」「人物」に注意して、場面分けをしよう。(A児)・「山場」はどこかな。(B児)</li> <li>・場面ごとに1文で整理して、あらすじをまとめよう。(I児)</li> </ul> <p>⑨みんなで読み深めることを決める。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・【山場】のところが、やっぱり難しいことが多いよ。(I児)</li> <li>・「おとう」や「与吉じいさ」のことも、みんなで読んでおいた方がいい。(J児)</li> </ul> <p>⑩～⑯みんなで読み深める。(グループ→全員)</p>	<p>◇物語を読み進めるための基礎的な技能を身に付け、「海のいのち」に生かそうとしているか。(発言・ノート)</p> <p>※⑦～⑨で「かさこじぞう」で身に付けたことが十分に発揮されない場合は、全体への補助発問や個人への言葉がけで支援する。また、掲示を生かすように促す。</p>
<p><b>【みんなで読み深めること】</b></p> <p>⑩なぜ、父は「二メートルもある大物をしとめても」「不漁の日が十日間続いても」何も変わらないのか。</p> <p>⑪なぜ、太一は与吉じいさのでしになったのか。</p> <p>⑫なぜ、与吉じいさは「千びきに一びきでいいんだ。」と思っているのか。</p> <p>⑬なぜ、太一は与吉じいさに「海に帰りましたか。」と言ったのか。</p> <p>⑭なぜ、太一は「この大魚は自分に殺されたがっているのだ」と思ったのか。</p> <p>なぜ、「この魚をとらなければ、本当の一人前の漁師にはなれないのだと、太一は泣きそうになりながら思」ったのか。</p> <p>⑮なぜ、太一は瀬の主に向かって「えがおを作っ」て「おとう」と言ったのか。</p> <p>なぜ、太一は「大魚はこの海のいのちだと思えた」のか。</p> <p>⑯なぜ、「もちろん太一は生がいだれにも話さなかった。」のか。(本時)</p> <p>⑰「不意に」「実現した」「夢」とは、どのような「夢」か。</p>	<p>※物語における題名の重要性や象徴性に着目できるよう、児童からの発言やつぶやきが出ないようであれば、⑮では、題名も「海のいのち」であることにふれる。</p> <p>※⑩～⑯では、読み深めるための方法や話し合いがスムーズに進んだ理由などを振り返ることで、次時以降で読み深めるときにそれらの点に気をつけられるようにしていく。また、児童は話し合うことに夢中でその方法のよさに気づいていないことも考えられるので、その場合は、教師が示すことで自分たちのよかった点を意識させる。</p> <p>※友達の考えにも刺激を受けながら自分の表現を仕上げていけるよう、「作品の心」は完成したもので交流するのではなく、完成させる過程で交流する時間をとる。</p>
<p><b>「海のいのち」の【作品の心】をまとめ、単元をふりかえろう。⑱⑲</b></p> <p>⑱【作品の心】を短い言葉でまとめ、伝え合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・バトンを受け取って、次の人にバトンを渡すリレーのように、「海のいのち」を大切にすることを、「おとう」「与吉じいさ」「太一」に受け継がれていくような感じがした。太一の子どもも、きっとそれを受け継いでいくと思う。(K児)</li> <li>・「海のめぐみだからなあ」と「海のいのち」に感謝をして、自然を大切にしていこうと作者は伝えたかったと思う。ぼくも自然を大切にしたいと思った。(A児)</li> <li>・太一には、子どものころから夢があって、それ叶えていた。「与吉じいさ」のように影響を与えてくれる人がいたから太一は、それができた。自分の夢をかなえるための努力と助けてくれる人への感謝の気持ちをもつことが大切だと思った。(J児)</li> </ul> <p>⑲【作品の心】を練り直し、単元のふりかえりをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「いのちの大切さ」だけではなく、それがつながっていることも加えたいな。(I児)</li> <li>・前半で身に付けたことを生かして、自分たちが読み深めることができた。(C児)</li> <li>・物語をどうやって読み深めるのかが分かってきた。もっと読んでみたい。(A児)</li> </ul>	<p>◇本文の叙述や読み深めてきたことをもとに、自分の感想をまとめることができたか。(ノート)</p>

課題提示	予想される児童の反応	補助発問	自己評価	※教師支援 ◇評価
なぜ、「もちろん太一は生がいだれにも話さなかった。」のか。				
【A児・G児・H児・I児】 ※窓側のグループ		【B児・D児・J児・K児】 ※廊下側のグループ		
<ul style="list-style-type: none"> <li>今日の問題は、どこを読めばいいのかな。書いてあるのは【結末】の部分だけど、ここだけでは分からない気がする。(H児)</li> <li>一回、全部を読んでみようか。(A児)</li> <li>瀬の主がいたことをみんなに知られたくないのかな。(I児)</li> <li>ほかの漁師にとりに行かれないとか。(G児)</li> <li>「海のいのち」を守るためかもしれない。(H児)</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>※K児：前時欠席</li> <li>「もちろん」は、当たり前っていう意味かな。(J児)</li> <li>念のため、国語辞典で調べてみる？(D児)</li> <li>「言う必要もない」という意味だとすると、そんなことは書く必要もないくらい当たり前のことだっていうことになるよ。(K児)</li> <li>どうして当たり前なのかな。瀬の主をたおせなかったのがはずかしいのかな。(B児)</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>※どの子も話し合いに参加し、言葉を発する機会を増やすために、活動は意図的に構成したグループ単位で進める。</li> </ul>
【C児・E児・F児】※教室後方のグループ ※C児：前時欠席				
<ul style="list-style-type: none"> <li>何を話さなかったのかな。(E児)</li> <li>瀬の主にもりを打たなかったことかな、瀬の主に会ったことかな。(C児)</li> <li>「もりを打たなかったことは」って書いてあるよ。(F児)</li> <li>「もちろん」っていうのは、それが当たり前っていう感じがするけれど、どうして当たり前なのかな。(F児)</li> <li>もし、だれかに話したらどうなるのかな。(E児)</li> </ul>				<ul style="list-style-type: none"> <li>※児童が構えることなく気づきや考えを述べられるように、ホワイトボードを使用し、それにメモをとるたちでグループ活動を進めさせる。</li> </ul>
みんなで考えよう。				<ul style="list-style-type: none"> <li>※主体的な活動をめざすために、また、そうするための気づきを引き出すために、具体的なグループでの活動の役割分担や流し方などは示さない。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>H児くんの話を聞いて、「海のいのち」を守るために、他の漁師やマスコミとかに来て欲しくないからじゃないかなと思った。(E児)</li> <li>千びきに一びきしかとらないから、「海のいのち」はかわらない。でも、瀬の主のことが話題になって、たくさんの人が父の瀬にやってきました、「海のいのち」がかわってしまうかもしれない。だから知られたくなかったのか。(J児)</li> <li>村一番の漁師は、「海のいのち」を守るのが当たり前だから、「もちろん」ということかな。(C児)</li> <li>瀬の主をたおさなかったことを理解してくれる人なんていないって思っているのかも。ばかにされるだけだと思っているから、言いたくないんじゃないかな。(F児)</li> <li>ここまで読んできた人には、理由なんて言わなくても分かるでしょっていいたいのかな。(K児)</li> </ul>				<ul style="list-style-type: none"> <li>※多様な考えが出るように、グループでの活動には極力介入せず、グループの話し合いの方向性を把握することに努める。</li> </ul>
今日の学びを確かめよう。				<ul style="list-style-type: none"> <li>◇グループでの話し合いに積極的にかかわろうとしているか。(活動の様子)</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>どこがひっかかるのかを聞きながら進められた。(H児)</li> <li>村一番の漁師は、たくさん魚をとるとのことじゃない。(A児)</li> </ul>				<ul style="list-style-type: none"> <li>※(B児やG児の読み取りが浅いと判断した場合)「瀬の主をたおせなかったことが恥ずかしくてだれにも言えない」と考えた児童が、どうして他の意見(例：「海のいのち」を守るため)に賛成したのかを話させることで、B児やG児を間接的に刺激する。</li> </ul>
				<ul style="list-style-type: none"> <li>※本時の学びを読み深めたことの確認と読み深め方の確認の両面から振り返られるよう、二つの視点で記述させる。また、顕著な児童に発表させることで、学びを共有する。</li> </ul>
				<ul style="list-style-type: none"> <li>◇「もちろん」という文中の言葉にこだわりをもって読み深めることができたか。(活動の様子・記述)</li> </ul>